

# Life (生活・人生・生命) を深める保育実践理論 の探究

(山本一成氏)

## 「研究成果報告書」を 読む手がかり

はじめに  
「ひびく・まざる・わきだす」で  
保育を探究しよう

ありのままの世界を遊び楽しむ子どもたちのお陰で、本研究のプロセスは実に面白い体験に恵まれました。神の顕現けんげんに照らされて顔の面が白く光っている様子から「面白い」と言われるようになったという語源にもとづけば、子どもたちは「神のあられり」ということになります。「七つ前は神のうち」や「童心神に通ず」という言葉が連想されます。

地球に生まれたばかりの子どもはあらゆる体験を新たな出会いとして、もてる感覚のすべてを働かせこの星を生きていきます。子どもたちが「ひびく・まざる・わきだす」人間社会はど

んなでしよう。その子どもたちとともに「ひびく・まざる・わきだす」保育とはどんなでしょう。保育は理想を謳い続けます。今を生きゆく日常の生と恒久平和を志す私たちの生と、人間を超えた大いなる生の循環について、ともに考えていきたいと思えます。「生き生き」と理想をほがらかに、高らかに謳いながら永遠の生命感覚を生きようとする「いま・ここ」の営みが保育です。

土や石、点や線描・ぐるぐる描きなどの関わりゆくもの、表しゆくものたちに生命を宿らせる「子どもさながらの天才」は子ども宇宙からの贈りものと言えるかもしれません。子どもたちと「ひびく・まざる・わきだす」を積み重ねていくたびに「子どもさながらの天才」が保育者のうちに生命のリズムにのってわきだしてきます。保育を愛してやまない皆さんと歌い踊りながら保育実践を深めていきたいと思えます。

山本一成氏の研究報告書では随所にそのチャンスが訪れます。保育の仲間の皆さんには「あるある」の事例ばかりです。「ひびく・まざる・わきだす」の自分リズムにのって、子ども・保育者・ダンゴムシ・カタツムリなどの多様な生命・園環境・自然現象など登場する一つ一つのものやそれぞれの場面と「ひびく・まざる・わきだす」しながら一つ一つの事例について味わってみてください。なぜ「ひびく・まざる・わきだす」なのか。その理由がじわじわと浸透

してくることでしよう。あらためてご自身の保育実践のそこかしこをご覧になった時、生のリズムによる感覚的な対話の素晴らしさを感じていただけましたら最高です。

### 1 子どものありのまま姿が生き生き 「わきだす」保育から

保育は生きています。生きているので呼吸します。呼吸には一人一人の子どもの生命のリズムがあります。ゆえに、かけ算のような「おなじ」の倍数ではなく、足し算のように「ちがいが」子どもの数だけ現れてくる世界です。「ちがいを愛し、「ちがいに」出会うほどに心のふり幅を大きくしなやかにしつつ、子どものさながらに「ひびく・まざる」保育を「わきだす」ていきたいと思えます。こんなイメージです。

「スキミングの前に出会う子どもの『気』。ムードを合わせ、溶かしているうちに、気が通い合いニコッと微笑み合う。子どもの『気』を愛で、味わい、タッチする。保育者の表情や仕草、歌いかけなどなど、保育における一つ一つの所作は何と愛情豊かな創造性に満ちていることだろう。『よしよし』と、ありのままの姿をあなたかく柔らかに受けとめられ、一人一人の特性や違いが生かされゆく保育の場には、いつも幸福感に彩られた情景とウェルビーイングな共生のカタチが拓かれ日常の芸術性が子どもたちへ伝わってゆく。

一人一人の子どもが現在を生きている証として繰り出す『遊びの産物』たち。そのかけがえのない姿形に愛しさが込み上げてくる。0歳児さんが触れただけ、手に取っただけの布やヨチヨチ歩き足跡も生の鼓動に満ちている。つぎに何を見つめ、何に向かっていくのだろうか。子どもがそこを寄せるものは、その出会いはどんなかな。どんなふうの世界に触れて、かわっていくことだろう。そこにその子どもならではの興味や関心・意欲が芽生え、天気や自然、環境たちへのかかわりが芽吹き、『いま・ここ』ならではの世界がつぎからつぎへと登場してくる。

喜怒哀楽の自由があり、どんなときも愛され、受け容れられ、その愛情をこころの基地にして、あたたかな雰囲気子どもと大人、誰のもとからもわきだしているような場所。喜びと充実の体験の記憶を育んでいく場所。『多様性という名の豊かさ』が、かかわり合うほどに各々の童心に発酵してゆく『子どもと大人のこころの広場』でありたい。

報告書の事例では、子どものありのままの姿を受容する場面が数多く登場します。安心の土台があつて子どもが生き生きとすることはご承知の通りです。子どもの「安心を支える受容」と「行為・表現を支える受容」のうえに「養護と教育が一体的に展開する」保育実践は現われてくるのですが、「生きて動いている」子ども

たちは変容し続ける主体です。受容と変容は密接な関係にあり、子どもに「寄り添う」ということは子どもの変容過程のさまざまな受容していくことを意味します。一人の保育者が複数の子どもを担当する保育の場では、全体を見守ることもしばしばです。

その際、これまでの見守りに「ひびく・まざる・わきだす」感覚をプラスすると「子ども―物的環境―自然環境―偶然」などからわきだしているさまざまな新たな気づきがわきだしてくるかもしれません。報告書の動画では、実際に一成さんが子どもと応答する場面を見ることができます。

## 2 子どものありのままの姿が 生きて生かされる共創の保育から

誰もがありのままにいられる「自由で受容的」な保育の場には、みんなのいい気が「ひびく・まざる・わきだす」してきます。一人一人の子どもの姿に感応しながら対話的に保育環境をつくっていきます。新たな自己との出会いと発見の予感にわくわくどきどきする鮮度の高い保育を子どもたちとともに創っていきます。こんなイメージです。

「0歳児さんがヨチヨチ歩き、触れたものを叩き、音を生み出している。保育室に置かれたペットボトルを見つけては掴みにゆきおもむるに振っては中に入っている液体を揺らしながら

視覚と共に音を味わい始めている。内からわきだす身体のリズムとペットボトルという環境が、彼が手に取った瞬間に共振・共鳴して原始の音楽さながらの愉しさをわきだしている。

ハイハイの先にボールを転がす、トンネルや斜面をつくる。手を伸ばす先に紐を垂らす、穴を空ける。つかまり立つ壁に突起をつくる、鏡をつける。子どもの姿や状況と対話するように生み出される保育環境は豊かな個性を持ったさまざまな子どものかかわりによって多様な活動をわきだしてゆく。

一人一人の鼓動がひびき、まざりあつていく生のリズム。子どもたちの姿を映しながら保育者がつくりゆく保育環境への細やかな対話的配慮が乳児保育にあつて多様な体験の地層となり、やがて子どもが自分自身の思いで願いのままにつくりたいものを決め、素材をあれこれと組み合わせせて工夫したり、試行錯誤したりするときのアイデアやセンスとして蓄積され、手持ちの実力となつて立ち現れてくるのである。

自分たちがつくり、遊んだ足跡は「自分たちの」生命を（園）生活へ浸透していく営みです。この軌跡を持続・継続することは、過去と未来を結ぶ「人生へ」のつながりを意味します。一成さんは子どもの生命が宿る遊びの跡のことを「姿跡」と名付けました。「姿跡」は「史跡」です。嬉しくなつて、以前に書いたこんな文章を思い出しました。

「遊びごころを収穫する。身体の丈を伸ばす。心の丈を膨らます。思いの丈を飛ばす。おもろいさんが遊びの道中で『おもろ遺産』をつくる。愉しいさんが『愉し遺産』をつくり、やがて『子ども遺産』が世界中に広がっていく夢。老若男女、みんなのこころが遊びごころでつながりそれぞれの人生を照らしますように。」

乳児期から子どもと保育者が自由に互いの主体性を生かしながら醸成する「共創の保育」の息づかいには、「生きることはつくること」「つくろは遊ぶこと」「遊ぶことはつくること」というライフスタイルを遊びや生活を通して、日常的に育み合う営みです。その息吹は幼児期、少年期、青年期を超えて生涯の生きがいをおきだす「創造する持久力」の心です。

### 3 「生まれてくるものづくり」とつくる共創の保育から

古いにしえからひとは天空や海、山、遙かなる大地など彼方を思い、日常の生活に、時に人生を占い自らの生命に結びつけ生きてきました。本研究では環境教育という名の人間の有用性に立脚する保育の語りでは、子どもの生の現実に到達できないことを明らかにしています。保育の中心にいる「子ども」に照らして、私たち保育者は「人間の真実」を見、時に教えられ、学びを深めていきます。そんな子どもたちが繰り広げている「生きているものどうし」とつくる共創の

保育をご覧ください。

「もみぢの語源は『揉み出づ』であるという。葉が色を変える驚きを揉んで色を出し、染料として生かしてきた生活体験に照らし、神々が山の木々を揉んで美しい色を出してくれているとの嘆美から『もみぢ』と呼ぶようになったという。先人は、このような自然との調和的生の歓びを言葉として現代に伝えてくれている。どれほどの月日と幾人の人々がかかわってきたことであろう。そこには、山紫水明、自然と人の主客一元的な自然観が根差している。暮らしたともに移ろう言葉。子どもたちも生活を映した言葉をつくっていく。

もうすぐ、園では年長さんが『藍建て』を行う。藍の種を蒔き、生長具合に一喜一憂しながら共に育ち、葉の収穫・乾燥、生葉染め、沈殿藍づくり、すくも（藍葉を発酵させた藍染の染料）づくりを体験しての今日である。すくもを仕込んだ自分たちの藍甕に語りかけ、抱っこや頬ずりをする。そんな暮らしのなかで藍甕の名前が付けられた。語源を辿れば乳児クラスの頃から、子どもたちの幸せを願い、その年の子どもと保育者ならではの多種多様な遊びをつくってきた体験に行きつく。生活の大半が遊びであった乳児期から少しずつ身の回りの生活へ参画してきた子どもたち。

古来の人たちがさながらに散歩や園庭で見つけた葉や花でたくさん色を出し、数々の遊

びに生かしてきた。どんぐりとの子どもどうしの関係は、自然との一体を意味する。手のひらでころろしたり、宝箱の住人になったり、装飾や作品の中心的役割を担ったりしてくれた。みんな『もみぢ』がそうであったように自分たちの体験から、その時々思いや祈りを込めて言葉を交わし、暮らしてきたかけがえのない共生者たちである。

自然との出会いは幾重もの歓びをもたらし、深い体験を起こしてくれる。感動のさまざまが、密度の高い遊び（活動）になっていく。感動密度の高い場所は、多種多様な生命の線や塊が蠢き、遊びを素晴らしく発酵させてくれる。子どもは新鮮な水や空気や土壌を循環させるように活発かつ豊潤に『好奇心菌』や『夢中菌』をふつつさせせていく。生きる歓びを意欲に代えて。」

豊かな保育環境とはなんでしょう。「環境を通じた保育」とは自ずから「環境に恵まれて行う保育」です。人間がいくら努力してもつくることができない大いなる生命への思いをふつつさせながら日々行う保育です。

おわりに  
「まざる・なじむ・ねかせる・はなれる」  
園の存在と時間

「藍甕」の存在は「なじむ・ねかせる」ことを可能にします。発酵菌たちが活躍するには、

「なじむ」時間と「ねかせる」時間が必要です。その時間を保障しているのが「藍甕」という場の存在です。

園、つまり保育者という存在は「子どもたちが生き生きとする」ために必要な「まざる・なじむ・ねかせる・はなれる」生のリズムを保障する「保」「育」の「藍甕」になりゆく存在です。

ゴールを設けない活動があること。子どもとの対話的共創により、子どもさながらの遊脈が生まれるようにすること。さまざまな遊脈で生命を宿らせている「姿跡」や「子ども遺産」を大切にすること。それらの環境が「藍甕」のようにならざるに存在していること。つねに「存在」することで、子どもたちはさまざまに、さながら

らの仕方でも、どこからでも自由にいくつもの遊脈に「ひびく・まざる・わきだす」とや「なじむ・ねかせる・はなれる」ことが可能になります。

一人一人の子どもの生のリズムが尊重され心情や状況に応じた時間と空間の自由があるからこそ多様な遊脈が混交する保育の場が現れてきます。「生き生きと生きること」の集積である過去とその永続性を願う未来を展望するところには、日常の生と人間を超えた生の世界を結びゆく保育の息づかいがあります。藍染のシーンに戻ります。

「藍甕に浸した手の先を見つめる子どもたち。あどけない指が徐々に布や糸を引き上げてい

く。眼前に現れてくる予想だにしない色、その変わりゆく様に固唾をのんで、見つめている。水で洗い、仲間と広げ、感動の青に歓声が飛び交う。つぎの瞬間、「あいちゃん！あいちゃん！」と歌い、踊り出す。随所に子どもなりの願いや祈りがあつた。青く染まった指を誇らしげに見せて笑う子どもたちが彩っていく『生活・人生・生命』の詩。」

実践を読む手がかりに代えて。

保育・子育て総合研究機構研究企画委員会

杉本 一久



①



②



③

- ① 過去・現在・未来がつながる遊脈混交の保育室（4歳児）
- ② 種から育てた藍液と語り、手間をかけ記録する年長児
- ③ 染めたての藍染シャツの紋りを解く前の期待と喜び

「Life（生活・人生・生命）を深める保育実践理論の探究」  
山本一成氏（滋賀大学准教授）  
「研究成果報告書」は、HP あおむし通信に掲載しています。  
<https://www.zenshihoren.or.jp/activity/ic/kenkyu.html>